

早稲田大学大学院日本語教育研究科

博士論文概要

論文題目

教室文化論序説

—学習者と作る対話の教室と教師の役割—

申 請 者

塩 谷 奈 緒 子

2 0 0 7 年 9 月

本研究では、筆者のアメリカでの教室実践から発生した問題意識を出発点とし、日本語教室活動における、教室活動の意味と教師の役割、そして、日本語教室において育成されるコミュニケーション能力について考察するため、「教室文化」という視点から教室を捉え直し、教室を対話的コミュニケーションが生起する実践のコミュニティとして捉え、そうした対話のコミュニティにおける教室文化、教室文化作りとはいかなるものかを考察した。

まず、第1部「理論編」の第1章では、1980年代から、学習者のコミュニケーション能力育成を目指して行われている「学習者の解放」について考察し、1-1. では、「学習者の解放」における教室内活動と教室外活動、そして、それらの関係について概観し、1-2. では、その教室内活動（演習）が、教師—学習者間の関係を中心として組織され、従来の「教室文化」とさほど変わらないのではないかという考えを述べた。つまり、そこでの教室内活動は、学習者が真のコミュニケーションを行う場としては捉えられず、そこでは、日本人の行動規範が徹底的に教えられ、練習される。それは、結局、教師管理のもとで作られる、従来の教室文化の世界である。

次の1-3. では、「学習者の解放」の教室外活動（接触場面）について考察し、そこでは、教師が接触場面の設置には尽力するものの、接触場面自体には基本的に関わらず、その結果、接触場面でコミュニケーション回避が起こったり、そこでのコミュニケーションが表層的なものに終わってしまう可能性があることを述べた。

続く1-4. では、「学習者の解放」では、その問題点を言語や言語行動上の技術的な問題として処すが、問題はそこにあるのではなく、むしろ、その教室内活動と教室外活動の分離と質的乖離 — 演習での静的文脈、一般的日本語行動、固定的な言葉に慣れた学習者が、教室外社会での動的な文脈、可変的な人間関係、流動的な言葉に対処しきれないということ — にあるのではないかと推測した。

そして、ここでは、このような問題を解決するために、問題をまた教導的な教室活動での練習へと戻すのではなく、あるいは、教室外にまた出ていくのでもなく、教室活動自体を動的な文脈、可変的な人間関係によって創造されるコミュニティとして組織し直し、そこで、学習者が、自立的かつ協働的に状況を乗り越えていく力、つまり、対話的コミュニケーション能力を育成する場に変えていくことはできないだろうか、との問題提起を行った。

続いて、第1部、第2章では、第1章で提起した問題の解決策を探り、新しい教室活動

の可能性を追求するため、教室研究の領域で探求されてきた、教室改変の試みについて考察した。まず、2-1. では、教室研究の領域で、古くから研究が進められている「教室文化」という考え方を検討し、それを批判的に捉えることから発生した二つの立場 — 教室内と教室外の「対置」(2-2.) と「並置」(2-3.) — について考察した。

まず、前者(2-2.) は、教室外社会を自然視、理想視し、教室文化を放棄、あるいは、現状維持したまま、教室内を教室外社会に近づけようとする立場である。ここでは、始めに、こうした立場の理論的基盤として取り上げられることの多い、「正統的周辺参加」と「認知的徒弟制」を概観し(2-2-1.)、次の2-2-2. では、こうした教室内と教室外を対置する立場が、教室外を過度に自然視することにより、そこにも本来存在するであろう人間間の相互行為や教への過程を不可視にしてしまう可能性があることを指摘した。

それに対し、後者の立場(2-3.) は、教室外を特別視することなく、教室内と教室外とを等しく葛藤や矛盾に満ちた場所として捉え、その克服のために、教室文化の作り直しを説く立場であった。本研究では、この教室文化を捉え直す立場について更に検討していくため、教室を対話的コミュニケーションによって創造される協働的なコミュニティへと再編していく試みについて考察した。そして、そうした研究では、等しく、教室の参加構造の作り直し、教室を構成する社会的状況の作り変え、教室文化の再編が叫ばれていることがわかった。

そして、次の第3章では、こうした教室文化の作り直しがいかに実現され得るか、また、教室文化は如何に解釈され得るかを改めて考察し、本研究では、社会歴史・文化心理学のアーティファクト(人工物)による媒介の考え方を援用し、教室文化を、「アーティファクトのシステムと、それらアーティファクトの中で行われる相互行為の中で、その都度立ち現れる関係的で動的な精神過程、行動過程、そして、それらが常に更新されながら、ある程度パターンを形成していくその可変的な集積」として定義し、教室文化作りを「教育対象(教育目標)に向かい、教室内にアーティファクトや人を配置し、それらアーティファクトや人の配置の中で、アーティファクトや人と相互行為すること」として定義した。

そして、第2部・実践編では、学習者の協働的相互行為能力(対話能力)育成を目指して行われる、日本語教室活動(早稲田大学日本語研究教育センター(現日本語教育研究センター)、別科日本語専修課程、2004年度・春学期・日本語3B(活動型)クラス)を分析し、協働的な対話のクラスを実現させるため、そこで、いかなる教室文化作り(従来の

教室文化との関係で語るなら、教室文化の改変、再構築）がなされているかを、人的、物的媒介物の観点から（分析1：2-1.）、そして、相互行為の観点から（分析2：2-2.）分析、考察した。

まず、分析1（2-1.）からは、本クラスにおける、アーティファクトと人の配置としての教室文化作りとして、以下のような物的、観念的、人的媒介が抽出された。

- | | |
|---------------|----------------|
| (1) 活動のテーマ性 | (5) 担当者間の分担と連携 |
| (2) 授業の公共性と評価 | (6) クラス外支援 |
| (3) クラス構成と形態 | (7) 後行型学習素材 |
| (4) 活動支援者 | (8) 教室内媒介と空間利用 |

また、分析2（2-2.）では、以上のような媒介物、媒介者（2-1.）の中、教師が、教室内相互行為を再構成し、クラス活動全体とその中の個人を質的に新しいやり方で再媒介し、教室内に、新しい社会的状況（相互行為や参加構造や権力構造）を作り出そうとしている様子が検出され、また、今回の分析からは、こうした教師による教室文化作りが、教室全体の相互行為の変化、参加構造の変化に伴い、変化していくことがわかった。

そして、本クラスにおける教室文化作りの分析からは、以下の段階性が抽出された。

- (1) 教室文化を作る：教師－学習者間の対話により教室文化を起こす
- (2) 教室文化を維持、定着させる：学習者－学習者間の対話により教室文化を連鎖させる
- (3) 教室文化を発展させる：学習者－学習者間の対話と学習者－教師間の対話が新たな教室文化を作る

ここでは、上記、(1) から (3) の変遷を経ながら、教師が学習者の認知を教師－学習者の二者間を超えた教室全体に張り巡らせ、その中で、学習者を、周辺資源付きで、周りの人的資源を背負った中で立ち現れる、協働的な認知主体として主体化していく様子が観察された。

また、クラスでは、以上のような教師による教室文化作りの結果、教室内に張り巡らされ、教室内に分散された認知の中で、学習者の考えや言葉や関係やコンテクストが作られ、教室活動が作られ、また、その中で、さまざまな葛藤や自己の揺らぎを経ながらも、学習者が協働的な相互行為を自立的に展開していく様子が見られた。

以上のように、本クラスにおいては、教室内のアーティファクトや人が、学習者の注意や認知や思考や記憶を分散させるべく、パーソンプラス的に再配置され（分析1）、また、

その中では、従来の教室内相互行為とは質的に異なるやり方で、クラス全体の活動と其中的の個人が再媒介され、その結果、クラスには、従来の教室状況とは異なる対話構造や参加構造や役割構造が現われていた（分析2）。

そして、分析からは、このように、グループメンバー同士が真剣に関与し合い、その関係性の中で生まれる考えや言葉は、たとえそれらが教室「内」で生成されたものとはいえ、「無限の文脈」から生まれる、「生きた日本語」、「本当のコミュニケーション」、「現実味のあるコミュニケーション」と言えるのではないか、との結論を得た。

そして、最後の第3部「結論」では、以上、理論面（第1部）と実践面（第2部）の研究成果を踏まえ、教室を一つの文化の単位として捉え、教室内媒介物と媒介者との相互作用、そして、学習者個人と教室全体との関係性において捉える、「教室文化論」の考え方について総括した。

本研究で既に述べたとおり、先行する教室研究では、IRE/IRF型、あるいは、パーソン・ソロ型の教室文化は、学習者が教室作りに「参加しない」ことによって作り出されるのではなく、むしろ、学習者が「参加しない」ことに積極的に参加することによって作り出されると言える。

つまり、それは、教室では、教師主導型でパーソン・ソロ的な教室文化が生じるよう、物的、人的アーティファクトの配置がなされ、その中で、学習者が声を失っていくように、教師—学習者間の相互行為（モノログ）が構成され、その過程、結果で、そうした精神、行動が間主観的に形成されていく、という考え方である。

それに対し、本研究では、教室で、学習者主体型でパーソン・プラス的な新しい教室文化が作られるよう、物的、人的アーティファクトを再配置し、その中で、学習者を主体化していくよう、教師—学習者間の相互行為（ダイアログ）を構成し、その過程、結果で、学習者の自立的で協働的な精神、行動を間主観的に形成していく、という考え方を提示した。

ここでの新しい教室文化作りとは、教室での個々の学習者にピンポイント的に焦点をあわせ、学習者個々の能力や認知を浮き立たせるようにアーティファクトや人を配置し、その中での相互作用を促進する、というやり方での教室文化作りではなく、学習者の認知を意識的に教室内に分散させ、その教室空間に分散された認知の網目の中で、学習者の関係性や互助性が立ち上がり、学習者の協働的で自立的な認知が立ち上がっていくよう、学習

者を支援していくというやり方での教室文化作りである。

これは、教室文化自体を改変し、教室を教室の相において編み直すという考え方であり、従来の教室文化で「悪」とみなされてきた IRE/IRF 型の相互行為や教師権力を、隠蔽したり放棄することによって解決を図ろうとする考え方とは異なる考え方である。そして、このような考え方のもと、今回、分析対象となった対話の教室においては、学習者の関係的で協働的な対話能力の育成という教育目標（対象）に向け、従来とは異なる形で、媒介物、媒介者が教室内に配置（再配置）され、従来とは異なる形で、教室内相互行為が織りなされていき、そのような中、学習者が対話のクラスの教室文化の網目の中に埋め込まれていく様子が見られた。

もちろん、教室には、学習者が自由に動く自由領域があり、こうした教室文化作りによって、学習者の姿勢や態度が完全に制御され、決定されることはない。しかし、それだけに、とりわけ、新しい教室文化を教室に生成しようとする際には、この、「媒介物・媒介者」、そして、「教室内相互行為」の両者を視野に入れ、教育目標・対象に向け、統合的にクラスを作っていく視点が必要なのではなかろうか。

そして、このような統合的な視点こそが、筆者の過去の実践において欠けていた視点であり、また、学習者の解放において抜け落ちている視点であり、ひいては、現在の日本語教育においても、まだ十分に考慮されていない視点ではないだろうか。

このように、教師には、教室におけるアーティファクトや人の構成と、そこで実際に生起する相互行為、相互作用とを統合的に捉える視点が必要であり、そのどこかが整合性に欠けているなら、その活動は、教師が期待する成果から、少しずつ、だが確実に逸脱していくものと考えられる。これは、教師が直面している教室現実を、未来に向け、変革、改変可能なものとして捉える希望に満ちた躍動的な考え方であるが、それは、また、同時に、教師が直面している教室現実を、教師が自分自身との関係性において捉え、その現実を、自分もその一端となって作り出しているものとして捉える、責任に満ちた厳しい見方でもある。

そして、教室活動をこのような教室文化という視点から捉えるならば、そこには、必ず、教室を全体として捉える統合的な視点が浮かび上がってくる。そこで必要となるのは、教室でどのような教室文化が目指され、志向されるのか、そのためには何がなされるべきか— 活動全体の中で、活動として、そこでは何をなしとげようとするのか、そして、そのた

めには、どのような媒介や人や相互行為が必要で、それらが相互作用することにより、そこでは、どのような教室文化が生起するか — という、教室文化作りの視点である。

以上のような視点の下、本研究で分析対象としたクラスは、筆者が、過去、行っていた、始めに学習者に教えるべき言葉が存在し、その定着と強化のために、教師が教室内コンテキストを作り、教室内会話を進行させ、支援を行う活動とは質を異にしていた。

このクラスでは、教師—学習者間の対話が学習者—学習者間の対話を生み出し、学習者—学習者間の対話がまた学習者—教師間や学習者—学習者間の対話を呼び起こし、様々な対話が絡み合い、重なり合うことによって、教室活動が作り出されていく。

このクラスにおける対話は、前もって予定調和的に用意されているものではなく、教室活動の着地点も予め予想され得るものではない。つまり、このクラスにおける教室活動は、はじめから「そこにあるもの」ではなく、教師—学習者間、学習者—学習者間の主体的で具体的な対話が一つずつ積み重なり、積み上げられていくことにより、「0（ゼロ）」から作り出されていくクラスと言える。

この意味において、本クラスは、教師だけが作るのでもなく、学習者だけが作るのでもなく、両者の相互主体的で間主観的な考えと言葉が渾然一体となって作り出す、相互行為現象の積み重ねとしての対話の教室と言えよう。

この対話の教室においては、IRE/IRF 型の教導的な教室活動とは異なり、学習者が対話活動の主役とみなされる。よって、そこでは、始めに、学習者には考える力があり、考えていることがあり、それを表現する力があり、それらは自他との自立的かつ互恵的な対話の還を通してこそ、よりよく実現すると考えられる。

そして、このように考えると、そこでの教師の役割は、学習者の、時に、学習者の中で眠り、または、抑えられている対話能力を目覚めさせ、浮かび上がらせていくこととなる。そして、教師は、それが学習者の中に内化されていくよう、教室内に媒介物、媒介者を散りばめ、その中で、学習者と対話を行い、学習者と共に教室文化を作り、教室活動を作っていくこととなる。

このような中、対話のクラスにおける教師は、学習者間の対話の中に身を投じ、学習者の対話の過程において、あるいは、その結果に即して、学習者の対話に根ざした支援を行っていく。こうして、対話のクラスにおける教師の声は、学習者との対話を介し、学習者の考えや言葉や教室コンテキストとの間で、それらと不可分な形で立ち現れることとなる。

また、ここでは、教師が学習者を媒介、再媒介するだけでなく、教師自身もクラスの中で媒介され、再媒介されていくと言えよう。つまり、対話の教室では、まずは、教師自身が、教室内に飛び込み、その中において、人（学習者や、学習支援者や、更に、学習者の向こう側にいる対話相手）や物（教室活動に関わるアーティファクト）と結びつき、学習者をそうした人や物と結び付けていく。

このように、対話の教室における教師の役割は、固定的で一義的なものには止まらない。対話のクラスにおける教師は、教室をどのようなコミュニケーション空間にしたいのか、教室内でどのような相互行為を発生させたいのか、そして、そのために自分は教室において何をなすべきかを自問自答し、そうした教室文化作りの状況判断に常に迫られることになる。そして、その結果、教師は、教室内対話の変化や学習者の変化に応じて、絶えず柔軟に変化していく存在となる。

本研究からは、学習者の対話能力とは、自然発生的に起きるものというよりは、むしろ、教師が自らが主体的な表現者となり、きっかけを与えて起こすもの、そして、いったんそのスイッチが入れば、学習者間で動き出していくものであるとの考えを得た。そして、そうしたクラスの素地ができれば、教師は、それらが持続し、さらに発展していくよう、自らもその対話の還に加わっていく。

このように、教室における協働的な相互行為や分散認知とは、はじめから「そこ」にあるものではなく、むしろ、きっかけを与えられることにより起きるものであり、分散された認知を目指して、教室内に物や人を配置すれば、そこで協働的な相互行為が自然と立ち上がる、というのは、ナイーブな考え方であると言えよう。教室で、もし何もなされなければ、認知は、個体的な認知にとどまることが多いだろうし、そこでは、やはり、物と人、人と人をつなぐ支援が必要であり、そして、そうしたきっかけを与えられ、それを良いものとして認識すれば — 本研究の分析の中にも垣間見られたように、学習者が、そうした他者との関係性の中で生起する自己の新たな一面（自分の考えや言葉）や新たな周辺に新しい価値を見出せば — 学習者たちは、自分の力で考え始め、自分の力で、他者とながっていかうとし、そうした対話的なコミュニケーションを教室外でも行っていくのではないだろうか。そして、そのようにして形成される学習者の能力は、教室を超え、国境を越えて通用する、普遍的なコミュニケーション能力と言えるのではないだろうか。

以上のように、対話のクラスにおける教師の力、役割は、「学習者を自立的で協働的な表現主体へと育成する」という方向性において発現されていると言える。

これまでの教室文化研究においては、教師の権力性は悪しきものとして批判され、隠蔽や排除の対象とされることも多かった。その考え方は、教室には、教師（権力者）がいて、教室内では学習者は教師に従属する。だから、学習者をその権力から解放するために、学習者を教室外に出す、という考えである。

しかし、ここには、二つの問題点があると考えられる。まず、一つ目は、教師権力とは、そもそも知覚する側（学習者側）の問題でもあり、いくら教師がそれをなくそうとして、その放棄を高らかに宣言しても、それはそう簡単にはなくなるものではないだろう。

また、もし仮に、「教師権力は完全になくすことができる」と仮定したとしても、教師がその力、役目を放棄した先には、一体何があるのだろうか。そうした場合、その教育的な意味と教師の存在価値が問われることになるのではないだろうか。

また、そもそも、権力作用のない社会というものが果たしてこの世に存在するだろうか。例えば、学習者が教室内から教室外に出て、人間二人以上の何らかのグループ（家族、友達、ゼミ、サークル、アルバイト等）を形成するなら、そこでは、すでに、（学習者が意識しているにせよ、していないにせよ）何らかの権力作用が働いているはずで、そこで学習者が自分の好きなことを好きなだけ好きなようにできるということはないだろう。また、同様に、例えば、学習者が会社や組織で働き出した場合も、そこも真空の世界ではないだろうし、そこでも、やはり、学習者たちが全てを自分の思い通りにできるということはないはずである。

そう考えると、筆者には、やはり、教室内社会が教室外社会とそんなにかけ離れた世界であるとは考えられないし、また、教室内で解決できない問題を教室外で解決できるとは思えないのである。そして、このように、教室内外を本質的に同質なものとして捉えるなら、ここで重要となってくる学習者のコミュニケーション能力とは、個々の学習者が対峙している人間や、権力や、周りのアーティファクトに働きかけ、それによって自己が振動し、揺らぎつつも、それらとの関係性において、時々自分の言葉や考えを定位させていく能力であり、そうしたまわりの環境、自分の周辺を、自分自身で作り出していける能力であると考えられる。

それは、時々課題を前にして、人が他者を助けたり、また、他の人から助けをもらう

ことができる能力であり、それは、言葉によって、関係性を作り、関係性の中からまた言葉を作っていくことの繰り返しによって生まれると言える。そして、それは、自己完結的に発現される個性ではなく、人との関係の網目の中で発現される個性であり、それこそが、個別性と普遍性を兼ね備えた学習者の個性と言えるのではないだろうか。

筆者がこのクラスで育成しようとした学習者の能力も、自分の軸は持ちつつも、まわりの者や人にオープンで、それらに応じて振動し、それらとの相互作用によって自分の軸を更新していくコミュニケーション能力であり、自分の核は維持しつつも、まわりの環境に応じて自分の考えや言葉を調整し、自分の核の部分も少しずつ変化する関係的な自己である。

そして、以上のような考の下では、このようなコミュニケーション能力は、教室の中でも育成可能ということになる。つまり、クラスを、人や物や場所や教師自身や、すべてのものが絡み合い、関係しあった中で生じる、全体的で関係的な生きた一つの社会であると捉えるなら、そこで、学習者は、教室内他者や、教師という権威と対峙し、それらにどう対応し、乗り越えていくかを、教室内での相互行為を通して、じかに学んでいくことができるはずである。

教室研究の分野では、教室内の社会構造や権力構造は、教室内の相互行為（IRE/IRF）によって作り出されるとされていた。しかし、このように、相互行為によって教導的な教室文化や教師権力が作り出されていくのであれば、それを協働的な教室文化や、今までと質的に異なる教師の役割へと作り変えていくのも、また、教師—学習者間の対話的な相互行為であり、学習者—学習者間の対話的な相互行為であるはずである。

このように、本研究からは、教室における教師の力は、無条件に否定されるべきではなく、それが、「何を目的・目標として、如何に使われているか」という観点からも考察されるべきであるとの考えを得た。そして、筆者は、そうした教師の力が、物理的な場所からの解放ではなく、他者との環との間に形成される学習者の内なる声の解放のために、そして、そうした教室文化作りのために使われるのなら、それは意味あることと考える。

教室文化とは、教室を文化の単位として捉える見方、考え方であり、それは、学習者にとっても、教師にとっても、最も身近な文化の単位であるはずである。そして、日本語教師は、そうした文化を作ることが許されている数少ない職業のうちの一つなのであり、よって、だからこそ、そのコミュニケーション観、教室観、社会観、文化観等が常に問われ

るのであり、だからこそ、教師は自分が教室でどのような文化を創出しているのかに対し、常に自覚的でなくてはならないと言えよう。

以上、本研究では、筆者のアメリカでの教室実践で発生した疑問点を出発点とし、日本語教室活動における、教室の意味と教師の役割、そして、日本語教育において育成されるコミュニケーション能力について考察した。

今回の研究では、自分なりに、教室外の世界との関係性において、教室活動の意味を捉え直し、教室内外で普遍的に存在し得るコミュニケーションの意味について考えることができたが、しかし、今回の研究からは、以下二つの課題が残った。

まず、第一の課題は、教室文化論に関する理論面の精緻化の問題である。この理論に関しては、今後、より一層の理論面の補強と、実践による裏付けが必要となるだろう。また、その際、いかに実際の教室データを提示していくか、という方法論についても、今後更に、考えていく必要があるかと思う。

次に、教室を微視的文化発生の場として捉えた場合、やはり、いずれは、その外の文化との関わり、つまり、他の微視的文化との関わりや、(もし存在するとしたら)巨視的文化との関わりが問題となってくるだろう。これには、学習者の能力の「転移」の問題も絡んでくるかと思われるが、この面を明らかにするためにも、今後、更なる実践を重ね、活動データの収集と分析にあたりたいと思う。

本研究では、日本語教育においてはまだあまり手のつけられていない教室文化の問題について考察した。本研究を序論とし、今後も、理論と実践の両面から、教室文化、及び、教室文化作りについての研究を進め、日本語教育に貢献し得る教室文化論の知見を紡いでいきたいと思う。